



「ドムスデザイン」代表

戸倉 蓉子さん

とくら・ようこ 株式会社ドムスデザイン代表。建築デザイナー(1級建築士)。ミラノに建築デザイン留学した時には高齢者病院や車椅子、つえなどを作っている工場などを足で訪ね回ったというから、繊細さだけでなくバイタリティーも人並み以上。その行動力を生かして立ち上げた「ホスピタルデザイン研究会」が主催する「日本未来健康フォーラム ヘルスケア産業の最前線」が3月27日、東京で開かれる。問い合わせ先=03(6406)2525(同研究会)



壁一面に堀越千秋氏による生命の喜びにあふれる壁画を配したラウンジ(ジュノウィミズ・ウェルネス銀座産院銀座健康院、「ドムスデザイン」提供)

デザインで人を幸せに

代表を務める建築デザイン事務所の名前にある「ドムス」とは、ラテン語で「家」という意味。ホテル、マンション、スポーツ施設など数多くの建築デザインを手掛けているが、事務所の主なミッションは、病院を「家」にすることだという。

家族が共に暮らす家は日々の生活の場であるとともに、心と体の疲れを取ってくれる場所でもある。病院を家にするというのは、病

間づくり」が大切になる。そのことを実感したのは20代前半の看護師時代。担当した患者の一人に、苦しい闘病生活でまったく笑顔を見せない白血病の女の子

がいた。ある時、元気づけたいと思い、好きだというガーベラの花一輪を病室の窓辺に飾ると、その子の表情が一変し、「看護師さん、ありがとうございます」と笑顔を見せた。

「難病のお子さんを屋上に連れて行って、アイスクリームを食べさせたこともありました。闘病生活、頑張れる！」と喜んで食べてくれたが、怒られました。患者を主役と考えれば、発想は型破りになるが、型にはまった医療には適さなかった。

「その時初めて、人は病でベッドにいても、一輪の花や太陽の光、春の息吹で元気になることに気が付きました。そこで師長さんに「植物を置きませんか」と提案したが、受け入れてもらえなかった。

「ナイチンゲールに憧れ、人の役に立とうと、看護師になっても、当時の大病院は「白い巨塔」。医療で患者を治して退院させること

が役目との意識が強く、患者を少しでも元気づける環境にしたいという若い看護師の願いは通らない。理想と現実のギャップに心が揺れていた時、花一輪のエピソードは人を元気にするのは医療だけでなく、感動や希望が大切なのだと気付かせてくれたのだった。

これが転機になって、さまざまな仕事を経験した看護師から一念発起して転職した人はほかに聞かない。戸倉さんの言葉に説得力があるのはこの経歴と、常に人を主役に置くという

「病院は生まれる場所です、最期を迎える場所です。だから、コミュニケーションの核になるのが病院じゃないでしょうか。生まれるところ、最期を迎えるところが安心できる場所であれば、地域も変わります」

ひと

気を出すだけでなく、心と体を癒やして、人を元気にする場所に進化させること。そのためには、医師や看護師などの医療スタッフや医療機器だけでなく、環境つまり「人間が主役の空

間づくり」が大切になる。そのことを実感したのは20代前半の看護師時代。担当した患者の一人に、苦しい闘病生活でまったく笑顔を見せない白血病の女の子

がいた。ある時、元気づけたいと思い、好きだというガーベラの花一輪を病室の窓辺に飾ると、その子の表情が一変し、「看護師さん、ありがとうございます」と笑顔を見せた。

「難病のお子さんを屋上に連れて行って、アイスクリームを食べさせたこともありました。闘病生活、頑張れる！」と喜んで食べてくれたが、怒られました。患者を主役と考えれば、発想は型破りになるが、型にはまった医療には適さなかった。

「その時初めて、人は病でベッドにいても、一輪の花や太陽の光、春の息吹で元気になることに気が付きました。そこで師長さんに「植物を置きませんか」と提案したが、受け入れてもらえなかった。

「ナイチンゲールに憧れ、人の役に立とうと、看護師になっても、当時の大病院は「白い巨塔」。医療で患者を治して退院させること

が役目との意識が強く、患者を少しでも元気づける環境にしたいという若い看護師の願いは通らない。理想と現実のギャップに心が揺れていた時、花一輪のエピソードは人を元気にするのは医療だけでなく、感動や希望が大切なのだと気付かせてくれたのだった。

ペン・森田清策
カメラ・敷田耕造